

平安時代から江戸時代における「～ヲバ～ヲ」文について ——二重ヲ格との比較も含めて——

佐 伯 暁 子

1. はじめに

筆者は先に、佐伯暁子（2009）において平安時代から江戸時代における二重ヲ格について、次の三点を主張した。

- (1) 二つのヲ格の表す意味により、①-1二つのヲ格がいずれも対格を表し意味役割も同じもの（「〔省略〕手ヲ以テ^テ疵ヲ撫デ、去リ給ヒヌ。（『今昔物語集』巻六・一三）」など）、①-2二つのヲ格がいずれも対格を表し意味役割が異なるもの（「〔次には中宮の、菊の花を^{ハナ}籬を結ひたり。（『榮花物語』巻三七・けぶりの後）」など）、②二つのヲ格がいずれも移動格を表すもの（「死ナラバ悪口ヲスルヲサシ殺セ。サナクハ^ハ袴ノ下ヲ^タマクラヲ^クベレゾ。（『写本蒙求抄』中ノ下：森田武1965）」など）、③一方のヲ格が対格、もう一方のヲ格が移動格を表すもの（「悪い者共を町を追出だいた。（ロドリゲス『日本大文典』97ウ）」など）、の四種類に下位分類される。用例数から見て、中心的な用法であったと考えられるのが①-1である。
- (2) ①-1の二重ヲ格の二つのヲ格名詞句の間には、〔略述〕と〔詳述〕の関係が見られる。
- (3) ①-1の二重ヲ格は、広い範囲の時代・資料にわたり、一定の規則を持った文型として存在したことが確認される。

このように、平安時代から江戸時代に存在したと考えられる二重ヲ格は、例えば次のようなものである。

- (4) (省略) 此ノ被^{オハル}負ル男、負フ男ヲ肩ヲヒシト食タリケレバ、
（『今昔物語集』巻二七・四四）
- (5) 魯連ハ、魯仲連ナリ。仲ノ字ヲキツク。三字ツ、イタ名ヲ、中ヲキルガ多ゾ。
（『玉塵抄』巻七・19オ）

(4)(5)では、二つのヲがともに働きかけの対象を表している。二つの対格が同じ意味役割の場合、二つのヲ格名詞句の間に〔略述〕と〔詳述〕の関係が見られる。例えば(4)は、一番目のヲ格名詞句で「負フ男」と略述し、二番目のヲ格名詞句「肩」で体の一部分を挙げ詳述している。

(3)について、その根拠となる使用状況も示しておく。

表1 平安時代から江戸時代における二重ヲ格の使用状況（佐伯暁子2009の表1を一部改編）¹

資 料	①-1 （同じ意味役格） 対格・対格	①-2 （異なる意味役格） 対格・対格	② 移動格・移動格	③ 対格・移動	合計 格
土左日記	1				1
宇津保物語	1				1
枕草子	1	1			2
源氏物語	3				3
紫式部日記	1				1
榮花物語		1			1
夜の魔覚	1	1			2
更級日記	1				1
今昔物語集	15	1			16
宇治拾遺物語		1			1
古今著聞集	2				2
沙石集	1				1
秋夜長物語（『伽』）	1				1
写本蒙求抄			1		1
時学大成抄（岩瀬本）	1				1

資 料	①-1 （同じ意味役格） 対格・対格	①-2 （異なる意味役格） 対格・対格	② 移動格・移動	④ 対格・移動格	合計 格
玉座抄（巻一、七）	5				5
桑平夢物語（『假草』）			1		1
ロドリゲス日本大文典				3	3
伊曾保物語（『假草』）	1				1
きのふはけふの物語（『笑』）	1				1
唐糸さうし（『伽』）		1			1
梵天国（『伽』）	1				1
好色一代男（『西』）	1				1
好色一代女（『西』）	2				2
日本永代蔵（『西』）	2	1			3
用明天王聖人堂（『近』）	1				1
けいせい反魂香（『近』）				1	1
女殺油地獄（『近』）	1				1
合計	44 77.2%	7 12.3%	2 3.5%	4 7.0%	57 100%

※作品名の表記は、用例の調査に用いた日本古典文学大系や索引に従った。

※空欄は用例数が0であることを表す。

※『写本蒙求抄』の用例については、森田武（1965）に指摘がある。『時学大成抄』の用例は、『時代別国語大辞典 室町時代編』の「ちき（直）」の項で引用されたものである。

以上、佐伯暁子（2009）を概観したが、ここで注目したいのは、二重ヲ格が存在したのと同じ時期に(6)(7)のように一つの動詞がヲバとヲを同時に取る例も観察されるという点である。

(6) 人つく牛をば角を切り、人くふ馬をば耳を切りて、その標とす。

（『徒然草』一八三段）

(7) 大王、弓箭ヲ抛テ宣旨ヲ下シテ云ク、「今ヨリ宮ノ内及ビ國（ノ）内ノ人民、佛法ヲ可信シ。若シ此ヲ背カム輩ヲバ其ノ身ヲ可殺シ」ト。（『今昔物語集』巻三・二五）

(6)(7)のような文型は、先行研究において、二重ヲ格と区別されていなかったり、二重ヲ格の単なる変形として扱われており、詳細な調査はなされていない。佐伯暁子（2009）でも、(6)(7)のような文型は考察の対象外とした。しかし、二重ヲ格は平安時代から江戸時代において一定の使用が見られるが、時代が下ると許容されなくなるといった、変化が認められる構文

1 佐伯暁子（2009）の表1のうち用例が確認できなかった資料は除いた。調査資料については論文末を参照のこと。

である。こうした歴史的変化を遂げた二重ヲ格の全体像を捉えるとき、(6)(7)のような文型をどう位置づけるか考えてみる必要があると思う。本稿では、(6)(7)のような文型を「～ヲバ～ヲ」文と呼び²、使用状況を示すとともに、どのような文型なのか二重ヲ格と比較しながら分析を行う³。

2. 先行研究

「～ヲバ～ヲ」文の存在について指摘した先行研究はわずかである。松尾拾 (1958,1969) では、古代語における二重ヲ格について言及され、その例として「御迎へに来む人^をば、長き爪して眼をつかみつぶさん」(『竹取物語』)が挙げられている。山田忠雄ほか (1980: 日本古典文学大系『今昔物語集二』p435) では、「但シ其レヲ^をバ罪ヲ母ニ負セムト思カ」(『今昔物語集』巻九・二八) という例が挙げられ、「ヲ…ヲの変形と目される」と指摘されている。

このように先行研究では、挙げられた例がヲバを含むにも関わらずその点に目が向けられていなかったり、二重ヲ格の変形とされているだけである。

3. 「～ヲバ～ヲ」文の使用状況

二重ヲ格と比較するために、佐伯暁子 (2009) で行った二重ヲ格の調査と同様、ヲバのヲともう一方のヲが表す意味の組み合わせにより「～ヲバ～ヲ」文を分類すると、次の(8)～(14)に示す7つのタイプがあることに気づく⁴。

(a 対象ー対象)

- (8) うちとけぬ御有様なれば、「是うち向きて見給へ」と申させ給へば、女御殿、「笛をば聲をこそ聞け、見るやうやは有」とて、 (『榮花物語』巻六・かゝやく藤壺)

2 佐伯暁子 (2009) に従い、「(省略) 何とてはこなたをば重宝をなさるゝぞ」(『狂言記』巻四・二) のように一つの動詞がヲバのヲともう一つのヲを同時にとらない例、「(省略) 質子をばこれを受し、細子をば是をうとんず。」(『国字本伊曾保物語』上・四) のようにヲバを伴う名詞句をヲ格名詞句で言い換えている例は考察対象外とした。

3 筆者は、中村 (佐伯) 暁子 (2001) において「～ヲバ～ヲ」文の存在を指摘した上で、用法について検討し、構文として認められることを示した。その時点では二重ヲ格との関係は視野に入っていなかったが、「～ヲバ～ヲ」文を個別の構文としてだけでなく、二重ヲ格との関係という視点から眺めてみることも必要だろうと思う。本稿では調査対象を大幅に広げて二重ヲ格との対照を試みることで、「～ヲバ～ヲ」文の位置づけについて検討する。

4 中村 (佐伯) 暁子 (2001) では a, d, e のみを扱い、a を「金体ー部分」関係、d, e を「人ー場所」関係としていた。

〈b 相手ー内容など〉⁵

(9) (省略) 適ニ出入スル人ヲバ姓名ヲ問ヒ、行キ所ヲ尋ヌレバ、更ニ術無し。

(『今昔物語集』巻四・一七)

〈c 経由点ー経由点〉

(10) 瀬田をば稲毛の三郎重成がはかりごとにて、田上の供御の瀬をこそ渡しけれ。

(『平家物語』百二十句本、巻九・宇治川)

〈d 対象ー起点〉

(11) この人をば家・町・国・知行・所を払うた。 (ロドリゲス『日本大文典』97ウ)

〈e 対象ー経由点〉

(12) 頼朝おとなしやかに仰せらるるやうは、定めて首をば小路を渡されうす。

(ロドリゲス『日本大文典』97ウ)

〈f 被使役主ー対象〉

(13) 又は重(ね)て悟と入とを釋(し)て云(は)ク、悟(と)いふは外道の衆生をば覺悟を生(ぜ)令(めむ)との故(に)なり。

(石山寺本『妙法蓮華經玄贊』平安中期点・巻三)

〈g 被使役主ー起点〉

(14) 郎(ち)是は為に閑くに堪(へ)不者⁽⁶⁾をば席を退(か)シムルなり。

(石山寺本『妙法蓮華經玄贊』平安中期点・巻三)

a, b, c, dはそれぞれ佐伯暁子(2009)の①-1「対格ー対格(同じ意味役割)」, ①-2「対格ー対格(異なる意味役割)」, ②「移動格ー移動格」, ③「対格ー移動格」にあたるが、「～ヲバ～ヲ」文は二つのヲの関係が二重ヲ格よりも多様であるため、上記のa～gの用語を用いることにする。

a～gの用例を平安時代から江戸時代における資料から抽出したところ、表2のような結果が得られた⁶。表2から次の点が読みとれる。

- 5 二つのヲの意味役割が異なるもので、この他〈方向ー対象〉〈対象ー資格〉などがある。〈方向ー対象〉〈対象ー資格〉の例を1例ずつ挙げておく。「右と後とをば林をあて、左と前とをば野や澤をあて、陣を取ぞ。(『毛時抄』巻二・撃鼓)」「又惣テ師範ヲバ、能々先徳ヲキラヒテ、クワウリヤウニ左右ナク依府スベカラズ。(『却魔忘記』上)」なお、後者の例の「先徳」は、「先、徳」ではなく、「すぐれた先輩たち」(高橋秀榮訳 p192)と解釈される。「師範」として「先徳」を「キラフ(=選ぶ)」べきであると解釈でき、「先徳」は「師範」の資格を表していると考えられる。
- 6 資料は佐伯暁子(2009)の二重ヲ格の調査を受け、和文系資料、説話、抄物、キリシタン資料、御伽草子、仮名草子、浮世草子、浄瑠璃を中心に挙げたが、中古の和文にはヲバがあまり現れないことを考えあわせて(恒太知子1979参照)、漢文訓読文献も加えた。

表2 平安時代から江戸時代における「～ヲバ～ヲ」文の使用状況

資料	a 対象 対象	b 相手 内容など	c 相手 相手	d 相手 相手	e 相手 相手	f 相手 相手	合 計
小川本頼朝四分律平安初期点							1
源朝藏本頼朝四分律平安初期点 (巻46)							
東大寺法華部藏本成文論天長五年点 (巻12)							
正倉院書藏藏本成文論天長五年点 (巻11,13,16,18,22)	2						2
西大寺金堂聖德太子聖王平安初期点	3				1		4
佐藤本家大寺藏藏本成文論平安初期点							
知恩院藏本大寺三藏玄奘法師長安平安初期点							
竹葉物語	1						1
東大寺西宮部藏本成文論十輪經元慶七年点 (巻1,2,4,8,9,10)					5		5
正倉院書藏藏本成文論十輪經元慶七年点 (巻5)	1						1
伊勢物語							
石山寺本妙法蓮華經末卷平安中期点	2				1	3	6
土左日記							
上野本漢書院藏本天長二年点							
平中物語							
所詮物語		1					1
かたてふ日記							
宇津保物語	1						1
大和物語							
枕草子							
石山寺本法華經藏本長安元年点 (巻1,2,4,5,11)							
源氏物語							
紫式部日記							
榮任物語	2	1					3
氏の宛宛							
源公中納言物語							
定中納言物語							
更張日記							
大藏意記生文庫藏本成文論延久五年点							
扶衣物語							
舞臺寺本大慈恩寺三藏法師伝永承三年点 (巻7-10)	1						1
今昔物語集	6	1	1	1	1		10
法華石印圖書抄							
打聞集							
舞臺寺本大慈恩寺三藏法師伝永承四年点 (巻1-6)							
石山寺本大慈恩寺三藏法師伝永承元年点 (巻1,3,4,5,7)	1						1
早葉物語 (巻一)			1	1	1		3
早葉物語 (百二十回本)	3		1				4
却庵志記		1					1
正徳藏藏隨問記							
宇治拾遺物語							
土明抄	1						1
古今源聞集	2						2
十六夜日記							
抄巻集							
長草草	2						2
依夜氏物語 (『加』)							
徳山御切抄							
中葉若木抄抄	1						1
七抄抄 (巻1-3)		2					2
玉露抄 (巻1,7)	2						2
大の飯金句集	1						1
大の飯金句集	3	1		1	1		6
大の飯金句集物語							
ロドリゲス日本大文庫	2		2	1			5
伊賀氏物語 (『加』)							
伊賀の介 (『加』)							
きのふけふの物語 (『加』)					1		1
竹書 (『加』)							
仁孝物語 (『加』)							
成明本狂行							
狂行記							
浮城物語 (『加』)	1						1
文正さうし (『加』)							
妹かづき (『加』)							
小町草紙 (『加』)							
御作子鳥紙 (『加』)							
詩本さうし (『加』)							
未補集 (『加』)							
七草草紙 (『加』)							
源朝藏本成文論 (『加』)							
物くさ物語 (『加』)							
さくせいし (『加』)							
幼の草紙 (『加』)							
小教書 (『加』)							
二十四孝 (『加』)							
梵天傳 (『加』)							
のせ嶺さうし (『加』)							
巖のさうし (『加』)							
源朝藏本 (『加』)							
龍泉式部 (『加』)							
一寸法師 (『加』)							
さいき (『加』)							
雄略太閤 (『加』)							
雄略太閤 (『加』)							
西行集子 (『加』)							
熊野の御本地のさうし (『加』)							
好色一代男 (『加』)							
山田歌集 (『近』)							
熊の巻 (『近』)							
好色五人女 (『近』)							
好色一代女 (『近』)							
日本水信藏 (『近』)							
軽口落がほなし (『近』)							
常盤御用 (『近』)							
皆似ぬ中 (『近』)							
朝日御前 (『近』)							
川明大工職人傳 (『近』)							
龍川義直 (『近』)							
龍川義直 (『近』)							
龍川義直 (『近』)							
成徳御作侍夜の小笠原 (『近』)							
いひせいに成る (『近』)							
五十年返歌集 (『近』)							
以邊の鳥 (『近』)							
嵐山集 (『近』)							
夕霧阿波鳴鶴 (『近』)							
大御所御書 (『近』)							
同姓御書 (『近』)							
八行御書 (『近』)							
龜の横三巻御書 (『近』)							
山崎興典兵衛の門伝 (『近』)							
博多小太郎成成 (『近』)							
平家女道 (『近』)							
心中天の断片 (『近』)							
女教諭集 (『近』)							
心中若菜中 (『近』)							
匿名千本忠臣蔵 (『近』)							
我の子 (『近』)							
関上子 (『近』)							
鯛の味味津 (『近』)							
無常志 (『近』)							
合計	38	6	4	4	3	10	68
	55%	8.8%	5.9%	5.9%	4.4%	14.7%	100%

※作品名の表記は、川柳の調査に用いた日本古典文学大系や索引に従った。
※空欄は用例数がないことを示す。

- ・用例が見られない資料も多く用例が見られる資料でも用例数は少ない。しかし、平安時代から江戸時代を通して26作品で全68例確認できる。
- ・26作品のうち『今昔物語集』が10例と最も多く用いられている。
- ・ヲバは江戸時代以降衰退していくため（信太知子1979,1980に詳しい）、『浮世物語』が用例を確認できる最後の資料である。
- ・漢文訓読文献の用例が全68例中20例と約3割（29.4%）を占める。
- ・aが38例（55.9%）と最も多く、全体の過半数を占める。
- ・bは6例（8.8%）、cは4例（5.9%）、dは4例（5.9%）、eは3例（4.4%）、fは10例（14.7%）、gは3例（4.4%）でいずれも用例数が少ない。
- ・二重ヲ格には現れないタイプであるe、f、gでも用例が確認された。
- ・使役文で用いられるf、gの用例全13例中10例が漢文訓読文献に現れた例である。

二重ヲ格の調査結果と比べると、次の点が見てとれる。

- ・共通の調査資料における「～ヲバ～ヲ」文と二重ヲ格の用例数を比較するため、「～ヲバ～ヲ」文の全用例68例から漢文訓読文献16作品の20例とその他11作品⁷の6例を除くと42例と、「～ヲバ～ヲ」文の方が用例数が少ない。この事実は、漢文訓読文献以外の資料において、二重ヲ格よりも「～ヲバ～ヲ」文の方が用いられにくかったことを表しているわけではないだろう。ヲバの衰退に伴い、『浮世物語』以降「～ヲバ～ヲ」文が現れないことが影響を与えていると考えられる。二重ヲ格の全用例57例から『浮世物語』以降の資料に現れる11例を除くと46例となり、「～ヲバ～ヲ」文とほとんど差が見られないことから裏付けられる。
- ・『平家物語』『徒然草』『天草版平家物語』では「～ヲバ～ヲ」文の用例のみが現れる。一方、『土左日記』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『夜の寝覚』『更級日記』では二重ヲ格の用例のみが現れ「～ヲバ～ヲ」文の用例は現れない。これは、信太知子（1979,1980）で、ヲバが中古の和文系資料であまり用いられず、室町期の切支丹文献で多用されるという指摘とおおよそ一致する。

このように、「～ヲバ～ヲ」文に見られる分布の特徴は、ヲバの分布の特徴をある程度反映していることがわかる。

先にも述べたように、「～ヲバ～ヲ」文も二重ヲ格と同様、広範な資料にあってもわずかに用例が見いだせる程度であるといえる。しかし、平安時代から江戸時代において、現代語で非文法的とされる二重ヲ格や「～ヲバ～ヲ」文がわずかながらも常に存在したことは事実

7 詳しくは論文末を参照のこと。

であり、二重ヲ格に加え「～ヲバ～ヲ」文の実態を解明することは意味があるように思われる。

4. 「～ヲバ～ヲ」文の用法

本節では、「～ヲバ～ヲ」文の実例の用例を見ていくことにする。aの「～ヲバ～ヲ」文は、68例中38例で全体の55.9%を占める。

- (15) 遠見ユル者ヲバ其ノ類ヲ皆切り捨ツ。(a 対象-対象) (『今昔物語集』巻五・一七)
- (16) 鄧公申サル、コトハ、「(省略)然間、諸侯王ヲバ知行ヲソロリソロリト削テ天子ノ方へ取りテ、天子ヲ強クシテ諸侯ヲ弱メント思フ也。(以下省略)」⁸ (a 対象-対象)
(『中華若木詩抄』二七「詠史」)
- (17) 又朝敵ナドヲバ、ミヤコニ、トガ人ヲ、入テラク、楼アリ。(a 対象-対象)
(『玉座抄』巻一・12オ)
- (18) あるは俱舎經の御讀經とて、眞言の心ばへありと聞しめずをば、世に出でたるをも、山に籠り寺に籠り居たるをも召し出づれば。(a 対象-対象)
(『榮花物語』巻一五・うたがひ)

上記の例は全て、ヲバのヲともう一方のヲがいずれも対象を表している。ヲバを伴う名詞句で示された内容に対し、(15)は身体的な一部分、(16)は所有物、(17)は性質がヲ格名詞句で示されている。ここで重要なのは、(15)～(17)はヲ格名詞句で示される内容に関わらず、まずヲバを伴う名詞句で示したい対象について簡略に述べ、次にヲ格名詞句でその対象の細部について詳しく述べるといことである。ここでは、ヲバを伴う名詞句で示される内容を〔略述〕、ヲ格名詞句で示される内容を〔詳述〕と呼ぶ⁹。また(18)は、「眞言の心ばへありと聞しめず」人の状態として「世に出でたる」と「山に籠り寺に籠り居たる」の二つが挙げられている。この例は、ヲにモが付加されヲモとなることで「～ヲバ～ヲ」文の後者のヲが二つ現れる特殊な例であるが、ヲバを伴う名詞句で略述され、ヲ格名詞句で詳述される点で(15)～(17)と同じ

8 「諸侯王ヲバ」は「削る」の項と解釈しにくい意味関係にあるように思われるが、「諸侯王ヲバ」のヲをとる述語動詞という観点から見ると、「削る」以外に確認できないということになる。(27)も同様である。なお(6)(15)(26)の「切る」は、「人ノ動物」を「刀で傷つける」と解釈できるので、ヲバを伴う名詞句は「切る」の対象と認められる。

9 中村(佐伯) 暁子(2001)では「全体」「部分」としていたが、佐伯暁子(2009)では例えば「(省略)緑ノ袈裟ヲ新ク清氣ナルヲ着給へり。(『今昔物語集』巻六・一三)」における「緑ノ袈裟」と「新ク清氣ナル」を「全体」と「部分」として説明するのは難しいため、〔略述〕〔詳述〕の用語を用いた。本稿でも佐伯暁子(2009)の用語を用いる。

関係にある。ヲバを伴う名詞句とヲ格名詞句の間に〔略述〕と〔詳述〕の関係が成立しているのは、二重ヲ格と同じである。

次に、上述のa以外のタイプの用例をそれぞれ挙げておく。

- (19) 〈省略〉適ニ出入スル人ヲバ姓名ヲ問ヒ、行キ所ヲ尋ヌレバ、更ニ術無し。(b 相手－内容など) (19)の再掲)

- (20) 瀬田をば稲毛の三郎が謀で供御の瀬を渡いて、(c 経由点－経由点)

(『天草版平家物語』 卷四・二)

- (21) 「按察大納言資賢卿、子息右近衛少将、雅賢、是三人をばやがて都の内を追出さるべし」
(d 対象－起点) (『平家物語』 覚一本、卷三・大臣流罪)

- (22) 頼朝おとなしやかに仰せらるるやうは、定めて首をば小路を渡されうず。(e 対象－経由点) (12)の再掲)

- (23) 「是ハ頼頼ノ城也。不知シテ此ニ来ヌル人ヲバ、先ヅ物ヲ不云ヌ藥ヲ令食^{クハシメ}テ、次ニ肥ユル藥ヲ令食ム。(以下省略)」(f 被使役主－対象) (『今昔物語集』 卷一一・一一)

- (24) 論に三止を釋(し)て云(は)ク、初の止をば相と為(ふ)。(省略)後の止は悪人をば席を退(か)令(めむ)と欲(ひて)なり(と)いへり。(g 被使役主－起点)

(石山寺本『妙法蓮華經玄贊』 平安中期点・卷三)

(19)は、「問ふ」の相手である「出入スル人」と¹⁰、「問われる」内容である「姓名」がヲバとヲで示されている。(20)は、ヲバとヲが経由点を表している。ヲバを伴う名詞句で「瀬田」と略述し、ヲ格名詞句「供御の瀬」でより詳細な場所を挙げている。(21)は移動する対象の人と起点、(22)は移動する対象と経由点がヲバとヲで示される例である。(23)は、動詞「食ふ」に対して「物ヲ不云ヌ藥」「肥ユル藥」が対象を表し、使役の助動詞「令む」に対してヲバで示された「不知シテ此ニ来ヌル人」は被使役主を表している。(24)は、移動を表す動詞「退く」に対しヲが起点を表し、使役の助動詞「令む」に対しヲバの構成要素のヲが被使役主を表している。

ここで、「～ヲバ～ヲ」文の二つの名詞句の関係をまとめ、二重ヲ格と比較すると、表3のようになる。

10 「問ふ」がヲをとることは、山田巖(1958)で指摘されている。([「家主女子ヲ「何ノ故ニ泣」ト問ヘバ」(『今昔物語集』 卷二六・一：山田巖1958)])

表3 「～ヲバ～ヲ」文と二重ヲ格に見られる二つの名詞句の関係

	二つの名詞句の関係	
	「～ヲバ～ヲ」文	二重ヲ格
a 〈対象-対象〉 (=①-1)	【略述】と【詳述】	【略述】と【詳述】
b 〈相手-内容〉 など (=①-2)	【働きかけを受ける相手】と【内容】など	【変化する対象】と【結果としての対象】など
c 〈経由点-経由点〉 (=②)	【略述】と【詳述】	【略述】と【詳述】
d 〈対象-起点〉 (=③)	【人】と【起点】	【人】と【起点】
e 〈対象-経由点〉	【対象】と【経由点】	
f 〈被使役主-対象〉	【被使役主】と【対象】	
g 〈被使役主-起点〉	【被使役主】と【起点】	

二重ヲ格との比較という点から見ると、a, b, c, dの四タイプについては二重ヲ格と同じ用法で、二つの名詞句の間にも同じ関係が見られた。一方、「～ヲバ～ヲ」文にはeの【対象】と【経由点】の関係も見られた。またf, gの使役表現も「～ヲバ～ヲ」文にのみ見られる用法である¹¹⁾。このように見てくると、「～ヲバ～ヲ」文では二重ヲ格よりも多くのタイプを認めることができ、興味深い用例が確認されたと言える。しかしながら、cは4例のうち3例が『平家物語』(覚一本)、『平家物語』(百二十句本)、『天草版平家物語』の同じ例(10例)であり、生産的な用法であったとは言えない。また、b, d, e, gも用例数が著しく少なく、周辺の用法と捉えざるをえない。fは全体の約15%程度を占めるものの、頻繁に用いられた用法ではないと考えられる。以上のことと、二重ヲ格が①-1 (=a)の用法を持つ構文として存在したことをあわせて考えると、aの「～ヲバ～ヲ」文が中心的な用法として存在したと考えたほうが妥当である。つまり、二重ヲ格も「～ヲバ～ヲ」文も二つのヲが対象を表し、二つの名詞句が【略述】と【詳述】の関係を表す文として存在したものと考えられる¹²⁾。

- 11 f, gの使役表現の例が「～ヲバ～ヲ」文にのみ見られる理由については、f, gの例が現れやすい漢文訓読文獻で「～ヲ～令む」よりも「～ヲバ～令む」の方が用いられやすいのかといった点も視野に入れて検討してみる必要がある。eの例が「～ヲバ～ヲ」文にのみ見られる理由とあわせて、今後の課題としたい。
- 12 a以外の用法が生産的でなく頻繁に用いられなかった理由として、d, gについては、ロドリゲス『日本大文典』に、「落つる」「逃ぐる」「去る」「退く」「退く」「立つ」「出づる」「出る」の動詞は「助辞Yori(より)」、Cara(から)を用ゐるよりも、対格を用ゐた方が上品である(109オ)という記述があることから、文体が影響しているのではないかと思う。bについては、意味役割の異なる対象をとる動詞が少ないことによるのではないかと推測される。これらの検証も含め、a以外の用例数が少ない点については今後の課題としたい。なお、全用例が68例と少ないのは、二つの補語を同時にヲで表さなければならず、かつ一番目の補語が主題または対比を表さなければならないという制約が影響している可能性があるように思う。そうした制約にも関わらず、aについては二重ヲ格と並行して存在したものと考えられる。

5. 対比を表す「～ヲバ～ヲ」文

以上のように、「～ヲバ～ヲ」文と二重ヲ格は用法上類似した文型と捉えられるが、全く同じ文型かというそうではない。当然、ヲバとヲの違いが両文型の違いにも反映している。山田昌裕・井野葉子（2005）によると、『源氏物語』のヲバには「対比となるか」「対比とならないか」の二種があり、「二者の存在が明示されている場合」に対比となるという。

- ㉔ 見る人、後れた方をば言ひ隠し、さてありぬべき方をばつくろひてまねび出だすに、
（『帚木』①五七：山田昌裕・井野葉子2005）

「～ヲバ～ヲ」文のヲバが対比として機能していると考えられる例には、例えば先の（6）の他、㉔が挙げられる。

- ㉔ （省略）幼いをば水に入れ、土に埋み、太人しいをば首を切る。

（『天草版平家物語』巻四・二六）

- ㉔ 心、敵のてだてをよう考へ、謀の上手をば身近う寄せ、いつも主人のことを恨み訴ゆる者をば所知、財寶をもはぎ取れ。
（『天草版金句集』Fの部）

aの「～ヲバ～ヲ」文のヲバが対比を表す例は38例中8例である。これに対し、当然、二重ヲ格が対比を表す例は1例も見られない¹³。つまり、ヲバとヲの機能の違いが両文型の違いにも反映していると言える。

もちろん、このような違いは、ヲバとヲの違いから必然的に帯びるものであり、自明とも言えよう。そうした点から考えれば、これまで二重ヲ格と「～ヲバ～ヲ」文が区別されずに扱われてきたのも了解される。しかし、先行研究で「～ヲバ～ヲ」文を二重ヲ格の変型とする根拠が示されていないのに対し、本稿では「～ヲバ～ヲ」文の使用状況や用法を詳細に調査、分析することにより「～ヲバ～ヲ」文を含めた二重ヲ格の全体像を明らかにしたことになる。

6. まとめ

本稿では、従来ほとんど論じられることのなかった「～ヲバ～ヲ」文の使用状況と用法について検討を行った。使用状況の調査により、二重ヲ格と並行して「～ヲバ～ヲ」文が存在したことが、両文型の分布が異なることを示した。また、用法の観点から二重ヲ格と比較する

13 次のような場合には二重ヲ格が用いられる。（『省略』太君は、琵琶を、御かたちはきよらに、いとけだかくて、おほのかなるものの音を、ゆるゝかにおもしろくかきならし、中の君は、（中略）箏の琴をひき給ふ。（『夜の魔術』巻一）

ことで、両文型には用法上の共通点が見られることをあらたに示した。一方で、「～ヲバ～ヲ」文はヲバの対比を表すという機能もあわせ持った文型として位置づけられるという点で違いが見られることも確認した。

「～ヲバ～ヲ」文と「～ハ～ヲ」の関係などさらなる検証が必要ではあるが¹⁴、「～ヲバ～ヲ」文の存在を認めることは、日本語史上のある期間に一定の使用が認められる二重ヲ格が非文法的な構文となっていく背景を解明する足がかりとなる可能性がある。本稿は、「～ヲバ～ヲ」文を手がかりとして二重ヲ格の全体像を解明しようとする試みの一つである。

調査資料

【二重ヲ格と「～ヲバ～ヲ」文】

『竹取物語 伊勢物語 大和物語』『宇津保物語』『落窪物語 堤中納言物語』『源氏物語』『枕草子 紫式部日記』『土左日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』『今昔物語集』『宇治拾遺物語』『徒然草』『平家物語』『御伽草子』『西鶴集』『近松伶瑠璃集』『湊瑠璃集』『榮花物語』『平中物語 濱松中納言物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』『正法眼藏随聞記』『古今著聞集』『沙石集』『假名草子集』『江戸笑話集』以上岩波日本古典文学大系（下線は表1、表2で用いた名称）『更級日記』岩波新日本古典文学大系、『更級日記』小学館日本古典文学全集、『中世日記紀行集』『十訓抄』以上小学館新編日本古典文学全集、『平家物語』新潮日本古典集成、『枕草子全注釈』角川書店、『源氏物語大成』中央公論社、『玉座抄』勉誠社、『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院、『文禄二年耶蘇會板伊曾保物語』京都大學國文學會、ロドリゲス『日本大文典』三省堂

【「～ヲバ～ヲ」文】

大坪併治（1958）『小川本願經四分律古點』『訓点語と訓点資料』別刊1/鈴木一男（1979）『聖語藏願經四分律卷四十六載僧薩撻度古點』『初期点本論攷』桜楓社/稻垣瑞穂（1954）『東大寺圖書館藏本成實論天長點』『訓点語と訓点資料』2.3/鈴木一男（1956）『聖語藏御本成実論卷十一天長五年点訳文稿』『書陵部紀要』6、（1954）『聖語藏御本成実論卷十三天長五年点訳文稿』『奈良学芸大学紀要』4.1、（1956）『聖語藏御本成実論卷十六天長五年点』『奈良学芸大学紀要』5.3、（1955）『聖語藏御本成実論卷十八天長五年点について』『奈良学芸大学紀要』5.1、（1957）『成実論卷二十二天長五年点（二）』『書陵部紀要』8/春日政治（1985）春日政治著作集別巻『西大寺本金光明最勝王經古點の國語學的研究』勉誠社/中田祝夫（1969）『東大寺諷誦文稿の國語學的研究』風間書房/遠藤嘉基（1955）『知恩院藏大唐三藏玄奘法師表啓古點について』『國語國文』24-11/吉沢義則（1930）『井々竹添先生遺愛唐鈔漢書揚雄伝訓点』『内藤博士頌壽記念史學論叢』弘文堂/藤枝徳三（1936）『舊鈔本史記孝景本紀第十一に用ひられたる訓点に就いて』『國語・國文』6-4/榮島裕（1965）『興福寺大本慈悲寺三藏法師傳古點の國語學的研究 譯文篇』東京大學出版會/中田祝夫（1958）『地藏十輪經元慶七年訓點』『法華經玄贊淳祐古點』『法華經義疏長保四年點』『大唐西域記長寛元年點』『古點本の國語學的研究 譯文篇』講談社

14 近藤泰弘（1998）に、ヲバを分析する際にはハの機能が重要であることが示唆されている。ハの機能を視野に入れて検討する必要があるが、この点については今後の課題としたい。

『中華若木詩抄 湯山聯句抄』『狂言記』岩波新日本古典文学大系、『却庵忘記』岩波日本思想大系、高橋秀榮訳『大乘仏典〈中国・日本篇〉』中央公論社、『法華百座聞書抄總索引』武蔵野書院、『打聞集の研究と総索引』清文堂、『十訓抄本文と索引』笠間書院、『十六夜日記校本及び総索引』笠間書院、『毛詩抄』岩波書店、『天草板金句集の研究』東洋文庫、『大藏虎明本狂言集の研究』表現社

参考文献

- 近藤泰弘（1998）「平安時代の「をば」の構文的特徴について―『源氏物語』の用例を中心に―」国語研究論集編集委員会（編）『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』pp.1282-1294、汲古書院。
- 佐伯暁子（2009）「平安時代から江戸時代における二重ヲ格について」『国語と国文学』86-4、pp.54-69、東京大学国語国文学会。
- 信太知子（1979）「『をば』小考―消滅過程の検討―」中田祝夫博士功績記念国語学論集刊行会（編）『中田祝夫博士功績記念国語学論集』pp.439-459、勉誠社。
- 信太知子（1980）「近世の「をば」について―武士ことばと文語との関連―」近代語学会（編）『近世語研究 第6集』pp.183-198、武蔵野書院。
- 中村（佐伯）暁子（2001）「『～ヲバ～ヲ』構文の構造と意味機能」『岡大国文論稿』29、pp.11-21、岡山大学言語国語国文学会。
- 松尾拾（1958）「源氏物語の文法」『日本文法講座4 解釈文法』pp.82-104、明治書院。
- 松尾拾（1969）「を―一格助詞〈古典語・現代語〉」松村明（編）『助詞助動詞詳説』pp.335-340、學燈社。
- 森田武（1965）日本古典文学大系『伊曾保物語』『假名草子集』岩波書店。
- 山田巖（1958）「今昔物語の文法」『日本文法講座4 解釈文法』pp.149-185、明治書院。
- 山田忠雄ほか（1961,1980）日本古典文学大系『今昔物語集二・三』岩波書店。
- 山田昌裕・井野薬子（2005）「『源氏物語』の文法講座 をば」上原作和（編）『人物で読む『源氏物語』第八巻―夕顔』pp.295-297、勉誠出版。

（さいき きょうこ 大阪成蹊短期大学グローバルコミュニケーション学科専任講師）